



## 『デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士』

丸山正樹 文藝春秋／文春文庫

本館	請求記号：X/080/B89/Mar	資料ID：701448094
神田分館	請求記号：J/913.6/Ma59	資料ID：701850877

### 国際コミュニケーション学部教授 宮本 文

2021年に映画『Coda コーダ あいのうた』とドキュメンタリー『私だけ聴こえる』の両作品が公開された。“Children of Deaf Adults”の頭文字をとった「コーダ」、すなわち、ろう者 (the deaf) の親を持つ、耳の聴こえる子どもたちを意味するこの言葉は、言葉自体1980年代アメリカで生まれたが、両作品に象徴されるように、それまで名付けられなかった自らのアイデンティティへの気づきを通して、「コーダ」をコミュニティあるいは一つの文化として模索する姿を丁寧に追った物語がより広まるようになってきた。本作品『デフ・ヴォイス』も2023年末にNHKにて草薙剛さん主演でドラマ化がなされた。

今から遡ること10年以上前に出版された小説『デフ・ヴォイス』の主人公も、ろう者の両親・兄の4人家族のなか一人、聴者として生まれ育った。コーダも一種のヤング・ケアラーと言えるだろう。主人公は小さな頃から常にろう者の世界とそれ以外の「普通とされる」世界との通訳を担ってきた。主人公はやがて家族から離れて、「普通とされる」世界にも居心地の悪さを感じ、そして家族への罪悪感を感じながら一人で生きている。この二つの世界の通訳を担うことの苛烈さは、「警察の取り調べ」そして「法廷」というもっとも「普通とされるルール」が圧倒的に強い権力の場に主人公を連れていくことによって社会や制度といった別の角度から顕れることになる。口話・日本手話などの非対称性にも話が及ぶ。また、主人公が法廷通訳士を務めることは、ろう者の世界と「普通とされる」世界との関係を再構築し、再びろう者の世界につながっていく過程でもあるのだ。

ミステリー小説としても読ませる本作を多くの学生さんが手に取ってくれることを願っている。